



2017年12月13日放送

頻用処方解説 桂枝茯苓丸加薏苡仁

つくばセントラル病院 産婦人科 岡村 麻子

主な効能

桂枝茯苓丸加薏苡仁の効能・効果は、比較的体力があり、時に下腹部痛、肩こり、頭重、めまい、のぼせて足が冷えるなどを訴えるものの次の諸症、つまり月経不順、血の道症、にきび、しみ、手足のあれとなっています。ここで血の道症とは、月経、妊娠、出産、産後、更年期など、女性ホルモンの変動に伴って現れる精神不安や苛立ちなどの精神神経症状および身体症状のことをいいます。

処方名の由来・出典

処方名の由来は、桂枝茯苓丸に薏苡仁を加えたものであることから命名されています。

処方の出典ですが、現在の使用法の直接の出典は大塚敬節（1900-1980）・矢数道明（1905-2002）らの昭和の漢方医書によるとされています。そのヒントは江戸時代に水戸藩出身の名医、原南陽（1753-1820）の『叢桂亭医事小言』に記載される甲字湯の加減方にあるとされています。

甲字湯は、『金匱要略』出典の駆瘀血剤の代表である桂枝茯苓丸に、胃腸を整える甘草と生姜を加えた処方で、「婦人の病気の十中八九は瘀血に属するもので、腰背痛、足の痛み、頭痛、肩こりなどに役立つ」とあり、その加減方として「腸癰（虫垂炎）には薏苡仁を加う」とされ、これが桂枝茯苓丸加薏苡仁の原型になったといわれています。ここで瘀血とは、血の巡りの悪い状態を言い、静脈系のうっ血、出血などに関する症候群といわれています。

生薬構成の漢方的解説（薬能）

桂枝茯苓丸加薏苡仁は、桂枝茯苓丸に利水・清熱、消炎、鎮痛、排膿・角化抑制・抗ウイルス作用を有する薏苡仁（ハトムギ）を加えた処方です。桂枝茯苓丸は桂皮、芍薬、桃仁、茯苓、牡丹皮の5生薬から成り立っています。血管拡張に働き、気を巡らせて冷えやのぼせを改善する理気の桂皮、駆瘀血作用のある桃仁、牡丹皮、芍薬が配合され、むくみを取り、精神安定にも働く利水安神の茯苓が加えられていて、気逆や水毒にも対応する駆瘀血剤の代表とされる構成になっています。

駆瘀血作用の生薬を詳しく説明すると、桃仁には強力な活血化瘀作用と潤腸通便作用、牡丹皮には活血化瘀作用と清熱涼血・止血作用、芍薬には鎮痛鎮痙作用があり、白芍と赤芍のうち、活血化瘀・止血作用のある赤芍が使用されています。止血にも有効ですが、理気作用はやや弱く、平性の桃仁と、寒性の牡丹皮・芍薬・薏苡仁に対して、温性の桂皮の配合で薬性のバランスもとれています。瘀血だけでも、皮膚の角化亢進が起これると考えられており、さらに薏苡仁の作用が相乗効果を生み出しています。牡丹皮や桃仁には子宮収縮作用があるとされ、薏苡仁も腫を排するという意味で、妊娠中の患者には投与しないことが望ましいとされています。

古医書における記載（大塚敬節・矢数道明の記述）

処方の原型となった、甲字湯については出典のところでも述べたとおりです。甲字湯に薏苡仁を加えて、腸癰（虫垂炎）に使用しました。治癒作用、美肌作用に使用する現在の使用法の直接の出典である、大塚敬節、矢数道明らの症例を紹介します。

大塚敬節は『症候による漢方治療の実際』（南山堂,1972）で、「桂枝茯苓丸は手掌角皮症や手掌、手甲などの荒れるものに用いられる。この際は薏苡仁を加えて用いる。」といい、『漢方診療医典』しみの項（南山堂,1972）には、「太り気味で、下腹に抵抗圧痛のある、鬱血性の人に生じたものは桂枝茯苓丸でよいことがある。薏苡仁を加え、便通のないときには大黄を加える。」としています。

矢数道明は拓殖大学の「漢方医学講義」で、ざ瘡に用いる処方として桃核承気湯、大黄牡丹皮湯、桂枝茯苓丸加薏苡仁を挙げ、「体質強壯、便秘の傾向あり、瘀血によるもの、腹証をつまびらかにしてこれら三方を運用す。」とし、桂枝茯苓丸加薏苡仁は「婦人卵巣機能障害による手掌角皮症に対して奏功することあり、もし貧血気味の場合は当帰芍薬散加薏苡仁を用いる。」と述べています。

現代における使い方

桂枝茯苓丸証、すなわち瘀血で水疱、化膿、皮膚甲錯（サメ肌）のある場合に幅広く応用できます。尋常性ざ瘡（とくに若い人で赤みを帯びていたり、月経の前後に悪化したりする場合）、アトピー性皮膚炎、手湿疹、色素沈着、尋常性疣贅、乾癬、蕁麻疹、掌蹠膿疱症、進行性手掌角化症などにも有効とされています。また、腫れものを取るという意味で、瘀血証で子宮筋腫、子宮内膜症、ポリープ、甲状腺腫、変形性膝関節症などの炎症があり痛みがあるものにも有効とされています。

EBM

月経周期に関連する尋常性ざ瘡に対して、改善効果を示唆する報告があります。

処方適用のポイント

過去の名医のポイントを挙げますと、瘀血の徴候があるものとされ、すなわち下腹部腹筋の緊張と圧痛、舌縁暗紫色化、舌下静脈怒張、顔色や皮膚のくすみ、ざ瘡が赤黒い等が着眼点となります。体質的には、中等度を中心にやや虚弱からやや肥満したものまで幅広く使用可能とされています。

筆者の適用ポイントとしては、まず名医に準じるということです。比較的体力の充実している人に適応されますが、元気がない人にも減量して使用したり、温裏補陽薬（大建中湯など）や補気剤（六君子湯、補中益気湯など）と併用使用することもあります。薏苡仁の利尿作用で便秘傾向になる場合があり、胃腸に触れることがあるため、理にかなっていると考えています。当処方の原型となった甲字湯加薏苡仁の甲字湯も、桂枝茯苓丸に胃腸を整える甘草・生姜を加えたものです。月経痛が強い場合は、桂枝茯苓丸の方が有効であることをしばしば経験します。薏苡仁は油脂成分のために、尋常性ざ瘡を一時悪化させる場合もあることに配慮が必要です。

類方鑑別

いずれも駆瘀血剤であり、瘀血により生じた皮膚疾患には有効です。桃核承気湯は、使用目的は似ていますが、便秘を伴い、イライラなどの精神神経症状がある場合に用い、左腸骨窩の抵抗と圧痛（小腹急結）を目標とします。大黄牡丹皮湯は、月経異常と化膿巣に有効であることは似ていますが、とくに右臍下部の抵抗と圧痛（小腹硬満）、および自発痛を目標とし、便秘を伴う場合に良い適応で、のぼせを認めません。腸癰湯は、使用目的は似ていますが、のぼせを認めません。大黄牡丹皮湯の便秘のない場合と考えると良いと思います。冬瓜子が加わりより抗炎症効果が高いと言えます。

当帰芍薬散は、月経異常や頭痛、めまいは似ていますが、体力は低下し、貧血傾向、四肢冷感やむくみがあり、下腹部の抵抗圧痛はあるが顕著ではない場合に良い適応です。加味逍遙散は、月経異常や頭痛、めまいは似ていますが、体力がやや低下し、不眠・不安、イライラなどの精神神経症状を認める場合に用い、肋骨弓下の抵抗圧痛（胸脇苦満）も目標とします。温経湯は、月経異常、手の湿疹などの皮膚症状は似ていますが、体力は低下し、口唇乾燥やほてりなどを認める場合に良い適応です。

自験例

症例は、25歳の未婚女性です。既往歴・家族歴は特にありません。主訴は月経困難症、月経前のご瘡です。現病歴としては、数年前から月経困難症、肩こり、腰痛、月経1週間前からの便秘、イライラ、下肢のむくみ、あごのラインの赤色のニキビに悩まされ、他院を受診し、月経困難症・月経前緊張症の診断で、低用量ピルを処方され内服していました。月経痛は軽快傾向にあるものの、症状の残存が認められるため当院初診となりました。

身体所見は、身長 160cm、体重 63kg で、やや赤ら顔、子宮筋腫や子宮内膜症などの器質的疾患を認めませんでした。舌は暗紫色、微白苔を認め、舌下静脈の怒張を認めました。腹力は 4/5、下腹部の圧痛を S 状結腸部に認めました。

治療経過は、実証の瘀血優位の気逆水滯と診断し、皮膚症状も認めることから桂枝茯苓丸加薏苡仁 7.5g 分/日、3 毎食前、便秘のある月経前 1 週間は桃核承気湯 2.5g 分 1 を就寝前に併用で処方したところ、1 ヶ月で月経痛、月経前の症状が軽快傾向となり、2 ヶ月でざ瘡が消失しました。低用量ピルの休薬が可能となり、漢方薬をその後 1 年間内服し、現在減量しながら経過観察中です。低用量ピルでは解決できない瘀血の諸症状に漢方薬が有効であった 1 症例です。